

聖書：マタイ 8：14～17

説教題：私たちの病を負うキリスト

日時：2018年12月16日（朝拝）

8章に入ってから、イエス様の2つの癒しのみわがが記されました。最初は1～4節のツァラアトに冒された人の癒し。二つ目は5～13節の百人隊長のしもべの癒しです。これに続いて三つ目の癒しの記事が今日の箇所に出て来ます。すなわちペテロの姑の癒しの記事です。ここからペテロが結婚していたことを私たちは知ります。Iコリント9章5節：「私たちには、ほかの使徒たち、主の兄弟たちや、ケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。」確かに彼は妻を持ち、妻の母すなわち姑とともに暮らしていたことが分かります。その姑が熱を出して、この時、寝込んでいました。ルカの福音書の並行記事を見ると「ひどい熱で苦しんでいた」と記されています。しかも姑ですから高齢です。どうにもこうにも体をコントロールできない痛みと苦しみの中で、彼女は床に伏しているよりほか何もできない状態にありました。

そんなペテロの姑のところへ行ってイエス様はいやしの御業をされます。ここに三つの特徴を見ることができます。一つは彼女の信仰が問われていないことです。イエス様はたいい癒しを行う際、「わたしにできると思うのか」などと尋ねられます。そしてその人の信仰を通してみわがをなるといのが一般的原則です。ところがイエス様はここでペテロの姑の信仰を問うようなことは何も言っておられません。とてもその告白ができる状態にはなかったのだと思われます。高い熱にうなされて痛々しい姿がそこにはあった。イエス様はそんな彼女をご覧になり、直ちに癒しのみわがを行なわれました。ここにイエス様のあわれみが示されています。このお姿は私たちにとっても大きな慰めです。時に私たちは様々な困難に囲まれたり、自らの弱さのゆえに、ふさわしい信仰の告白ができない状態にあるかもしれません。その場合は祝福はないのか。そうではないという実例を私たちはここに見ます。イエス様はあわれみの主として時に私たちの信仰によらずして、このようにして下さる方であることをここに見させられるのです。むしろ多くの場合、このような一方的なイエス様のあわれみに支えられている私たちであることを思わされるのです。

二つ目の特徴はイエス様は彼女の手に触れて癒しを行われたこと。前回そうであったように、イエス様はただおことばによっていやすことができました。しかし苦しみの中

にある彼女を思うその心によって、イエス様は高い熱に冒されている彼女の手に触れて御業を行ってくださいました。

そして三つ目はイエス様が触れた瞬間に熱が引き、彼女はすぐ起き上がって、イエス様をもてなしたことです。普通、高い熱が出た後は、いくら熱が下がってもフラフラするものです。すぐには動けません。ところがペテロの姑は起きあがってイエス様をもてなしました。これは基本的に「食卓に仕える」という意味の言葉ですから、彼女はさっそく台所に立ってご馳走を作ったのかもしれませんが。ペテロの姑はこれまで床に伏してうなっていたのがウソであるかのように、一気に体力まで回復したのです。イエス様のみわざは驚くべきものであったということです。

この噂について聞いたからでしょう。人々は夕方になると多くの人々をイエス様のみもとに連れて来ました。他の福音書の並行記事によると、この日は安息日だったようです。ユダヤでは日没から新しい一日が始まりますから、人々は安息日が終了するのを待って人々を連れて来たのでしょう。ここで強調されていることは、イエス様がこれらの人々を皆、お癒しになったということです。すべての悩み、病、困難に対して、イエス様は癒しと解決を与えることができる圧倒的な権威と御力を持っておられたのです。

さてこのように書き記したマタイは 17 節で、このイエス様のみわざの意義について重要なコメントをしています。17 節：「これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。『彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った。』」これは有名なイザヤ書 53 章からの引用です。イザヤ書 53 章は「苦難のしもべ」について語られた代表的な箇所です。そのことを思い起こす人は、あの章で語られていたのはメシヤの身代わりの受難ではなかったかと思うかもしれません。実際イザヤ書 53 章は、その預言で満ちています。5 節：「彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。」 6 節：「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」 12 節：「彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」 ですからイエス様がやがて十字架上で私たちの身代わりに死んでくださった時に、このイザヤ書の預言が成就したというのなら良く分かる。ところがマタイはここで、イエス様の人々の病を癒した時にこのイザヤ書 53 章のみことばが成就したと言っている。これは少しおかしいのではないか、引用が正しくないのではないかと思う方もいらっしゃるかもしれませ

ん。しかし結論から先に言えば、この引用は間違っていない。なぜなら彼がここで引用したイザヤ書 53 章 4 節にはこうあるからです。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。」ここに今日、私たちが心に留めるべき重要なメッセージがあります。それはキリストがもたらして下さる救いは罪からの救いであると同時に病からの救いでもあるということです。この 2 つは別々の事柄ことではなく、密接な関係にあります。ではこの二つはどういう関係にあるのでしょうか。

創世記 1 章から分かりますように、神が造られた最初の世界に病はありませんでした。「見よ、それは非常に良かった」と言われる最高の世界だけがそこにありました。そんなこの世に苦しみや病が入って来たのは人間が罪を犯したことによります。聖書はある人が病にかかったのは、その人自身が何か特別な罪を犯したからだというような直接的な関係を認めてはいませんが、病気の背後には人間の罪という問題があると言うのは真実です。ですから病という問題の根本的な解決をみざすなら人類全体の罪という問題と向き合い、これを解決するものでなくてはなりません。反対から言えば人類の罪という問題を正しく解決するなら病という問題も同時に解決されて行くことになります。マタイはそういう目で、この時の出来事を見ていました。すなわち彼が言いたいのは、このイエス様の癒しの御業は、イエス様のやがての十字架上の身代わりの死と切り離して考えることはできないということです。イエス様がここで多くの人々の病を癒すことができたのは単に神の子としての全能の力によったのではない。もしそうであるならイザヤ書 53 章ではなく、イエス様の神の子としての全能性を示す聖句を引用する方が良かったでしょう。しかしマタイはここでイザヤ書 53 章を引用しました。その意味は何でしょう。それはイエス様がこのように人々をいやすことができたのは、イエス様がやがて十字架にかかり、私たちの罪の呪いを全部ご自身に引き受けて下さる方だからです。すなわちこのイエス様のみわざはただでなされたものではないということです。このためには、イエス様は大変な代償を払われた。そういうお方としてイエス様はここで人々を罪の呪いから、その現れである病の力から解放することがおできになったのです。ですからイエス様は人々の病気を直接的にご自身の身に引き受けたわけではありませんが、そのいやしのために必要な代価をご自身が払われるという意味で、彼らの病を担ってくださった、ご自身が負ってくださったとすることができるのです。

このことは今日の私たちにはどのように適用できるのでしょうか。特に私たちが今日経験する病に何か光を与えてくれるのでしょうか。当時の人々が病に悩んだように、今日の

私たちも病に悩みます。そんな私たちにとって、当時の人たちはイエス様のそばでイエス様に病を治してもらって良かったが、今日の私たちにはその可能性がないと思って、当時の人々を羨ましく思うことしかできないのでしょうか。そうではありません。当時の人々も今日の私たちも根本的には同じ立場にあります。イエス様は今日の箇所では、やがて十字架にかかるお方として神の国の祝福を現わし始めておられますが、イエス様は今や確かに十字架のみわざを成し遂げられました。ですからイエス様は今は一層確かに、ご自身が勝ち取った權威によって病にある人を癒やすことができますし、また実際にそのように働いておられます。しかし私たちは極端にならないように注意しなければなりません。ある人々はこのことを強調し過ぎて、いわゆる「癒しの集会」とか「癒しのミニストリー」と呼ばれるものに熱心になってしまいます。イエス様の救いは罪からの救いだけではなく病からの救いでもあると言って、そのための特別な賜物を与えられたという伝道者が外国から招かれ、集会が開かれます。そしてそこでこんな癒しが起こった！こんな奇跡が生じた！などと宣伝されます。しかしイエス様に正しく祈れば私たちの願う方法とタイミングで、癒しが起きるのかのように考えることはできません。そのことはⅡコリント 12 章のパウロの祈りを思い起こせばすぐ分かります。パウロは主に何度も「肉体のとげを取り去って」くださるよう祈りましたが聞かれませんでした。それは主の最善の御心はもっと別のところにあったからです。私たちはパウロのように熱心に主に願って良いのですが、病が直ることを前提にした宣教の仕方は聖書から導き出されません。

しかし私たちが思うべきはこのことです。私たちは主の深い御心のゆえに、癒されたり、癒されなかったりします。しかしどちらの状態であっても私たちは主に等しく担われているということです。イエス様は十字架上で私たちの上にあった罪の呪いを全部その身に受けて下さいました。ですから私たちが信じるべきは、たとえ今ここで病にかかったとしても、その病からとげは抜かれているということです。私たちが病を嫌に思う大きな理由の一つは、それが死を予感させるものだからだと思います。このまま悪くなって死んでしまったらどうなるだろうと。しかし聖書が述べていることは、キリストは私たちに代わって罪の罰を全部受けて下さったので、今やクリスチャンにとって死は恐れるに足りないということです。Ⅰコリント 15 章 55 節：「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」 たとえとして牙のない蛇にかまれる時のことを想像してみると良いと思います。蛇にパクッとかまれることは誰にとっても気持ちの良いものではありません。これで毒が体に回って自分は死ぬかもと私た

ちは恐れます。しかし牙がなければ何の害も自分には及びません。あるいは針のないズメバチを考えて見ても良い。その大群に囲まれたら、もう終わりだと思ふかもしれない。しかし針がなければ大丈夫です。生きた心地はしないと言うだけで害は何もありません。死もクリスチャンにとっては今やそのようなものである。むしろ聖書では「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です」と言われている通り、益となるものであるとさえ言われています。死がこのようなものとなっているのですから、その死へと私たちを連れて行く病もまた、そこからとげが抜かれていると言えます。病気が進んで死に至っても、その死は私に何の害も及ぼせないばかりか、むしろ益をもたらす。このように見て来ると私たちの病は今や私たちが恐れているようなものではなく、実はイエス様の十字架によって担われていることが分かるのです。主がすでにそのとげにあたる部分を担って下さったので、私に残されているものは本来からすれはずっとずっと軽くされたものでしかない。呪いは取り除かれ、ただ益をもたらすものでしかないのです。

そしてこの信仰に生きる私たちにとっての望みは、やがての御国の完成の日です。ヨハネの黙示録 21 章 3~4 節：「私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない。以前のものが過ぎ去ったからである。』」 かの日には一切の罪が除き去られて、もはや死がなく、悲しみ、叫び、苦しきがないばかりか、病もない。私たちはいつも、頭が痛いとか、腰が痛いとか、腕や足が痛いとか、目が良く見えないなどと色々悩まされるものですが、どれも悪いところがなく、すべてが調子が良いという時はどんなに気持ちが良いでしょうか。体が軽くてジャンプしたり走ったりしても何の問題もなく、かえって気持ちが良いという時の状態は何と素晴らしいでしょう。神はやがて私たちに強い栄光の体を与えて下さって、この祝福に生かして下さいます。すでに成し遂げられたキリストの十字架のみわざのゆえに、この方に信頼する私たちの行く手にはこのような素晴らしい将来が用意されています。

その日までにはなお地上にあるがゆえの弱さ、悩み、また病にある私たち。しかし今日のみことばを通して覚えないことは、どんな中であろうとも主に信頼する私たちは担われているのだということです。主は当時の人々の病を背負っただけでなく、今日の私たちの様々な病をも十字架を通して担って下さっています。私たちはこの主に様々な癒し

を祈って良いのですし、また祈るべきですが、そのことを経て主の最善のご計画に委ねる幸せも知っています。祈ってもなお与えられる病は、主によってその多くを担われている病であり、本来からすればずっと軽くされている病に過ぎません。それはむしろ私たちに益をもたらす目的のもとに与えられています。このことを知る時に私たちは恐れることなく、主に感謝して、主が下さる導きと祝福の中に生きることができるのです。私たちは病にある時、主の十字架を見つめて、この祝福をより深く味わいたいと思います。私は一人ではなく、その重荷を共に担って下さっている主がそこにおられます。そしてすべてのことを通して、やがての完全な御国へと私たちを導いて下さる主に信頼し、大きな喜びと感謝を持って主に従い続ける私たちの今週の信仰の旅路へ進んで行きたいと思います。